象、馬、犬、猫、鼠、蛙、蝗

資本家と労働者、金持と貧乏人、今の世は實に此の二階級に分れてゐる。殊に其の資本家の中でも、岩崎だの三井だのと云ふのは、何億圓といふ、我々には勘定も出來ない程の大金を持つてゐる。それに引きかへ、貧乏人と云ふ中には、立ん坊だの、乞食だの、宿無しだの、行倒れだのといふ。ミジメな人が澤山ゐる。一方を象とすれば、一方は蟻のようなものだ。之が同じ人間と云はれるか。

尤も、此の象と蟻との間に、馬ほどのもあれば犬程のもある。猫ほどのもあれば鼠ほどのもある。更に下つては蛙ほどのもあれば蝗ほどのもある。それで馬ほどの奴は、象に比べれば小さいとも云はれるが、蝗や蛙から見れば、スバらしい大きな者で、之は矢張り象の同類なる大資本家である。次に犬ほどの奴でも、矢張り象や馬と一緒になつて、蝗や蛙を踏みつける者で、中通りの商人や地主などが之に當る。それから洋服を着たり羽織袴なつたりして、よく飛んで歩く紳士といふ連中、あれらは丁度、犬か猫かの大きさに當る者だが、あれは矢張り象や馬の手下になつて、鼠を取つたり、蛙を踏みつぶしたり、蝗の足をもいだりする奴等である。

それから又、小商人、自作農、小役人、それらは丁度、猫か鼠か位の所だらうが、其中でも、俺は猫だと思ふ程の連中は、牙と爪とを追廻して、天晴馬や犬の同類の積りでゐる。然し善く考へて見るがいゝ。小商人や自作農の地位がいつまで今の儘に保たれるものではない。猫だ猫だと思つてゐる中に、實際はいつか鼠になつてゐるのだ。殊に×××、×××、×××、×××、×××、×××、×××などが、小鼠ほどのナリなしながら、一かど大猫の同類の積りで、象や馬に忠義を立て、蛙や蝗などを敵として、威張りちらすほど滑稽な事はない。（進）

勞働者階級の解放

河上肇

今日の社會は貧乏と云ふ大病に冒されて居る所の、「痩せ衰へたる病人の如きものである。社會が此の如き大病に冒されて居ると云ふのである。然るに私の見る所に依れば、此醫師の仲間に大體二つの種類がある。其一は、醫學の素養の不十分な藪醫者であるか、又は金儲の爲に藥の濫賣りたがる不道徳な醫者であるが、何れにしても此等の醫者は病氣を治すよりは、寧ろ甚だしくならぬやうに、只抑へて行くのみであつて、中には病氣の長引くことを希望して居る者さへある。玆に一例を慈善救濟の事業に取らんか、例へば無料の宿泊所を作るにしても、簡易食堂を設けるにしても、此等の事業の爲め、貧民や勞働者が助かると云ふことは疑ひない。併し其は飽くまで貧乏人を貧乏人として置くと云ふ遣方であつて貧乏之に依つて根治する希望はないのである。

第二種の醫者は、病氣を根本的に治さうとする。それで注文が六かしい。姑息なる療法に反對する。然らば病氣の根本的治療法とは何であるか。社會問題の根本的解決法とは何である乎。一言にして蔽へば、勞働者階級の解放である。今日の社會に於て、經濟上奴隷的境遇に在る者は、其境遇から解放しなければ社會問題は到底根本的に解決され得るものではない。（而して）此大事業を斷々乎として實現するの使命に耐へ得るものは、勞働者を舍いて外に何人もない。吾人は勞働者に向つて一日も早く此大使命を自覺し、此大事業に參加する所の殉道の戰士とならんん事を、切望して已まざる者である。

（改版社會問題管見より）

余は勞働者階級の解放が上から來るだらうとは決して信ぜぬ。

—トロツキイ—

◉書籍目錄（無產者取次、送料不要）◉

近世經濟思想史論（一）社會主義　河上肇	一、五〇
科學的社會主義　堺利彦	一、五〇
マルクス傳　山川、堺	二、八〇
マルクス學說體系　山川均	二、八〇
マルクス經濟學　山川均	二、〇〇
資本論解說　高畠素之	二、〇〇
マルクス學研究　同	一、二〇
資本論（一、二、三、四）　堺利彦	六、九〇
唯物史觀解說　堺利彦	二、〇〇
唯物史觀研究　河上肇	一、二〇
賃勞働と資本　山口孤劍	二、五〇
階級闘爭史論　荒畑勝三	二、〇〇
財產の進化　高畠素之	二、〇〇
社會主義進化論　堺利彦	一、五〇
社會主義社會理學　高畠素之	二、五〇
社會主義と進化論　嶋中雄三	一、三〇
社會主義と宗教　大杉榮	一、八〇
クロポトキン研究　山川均	一、三〇
勞農露西亞研究　堺利彦	二、八〇
世界社會運動現勢　堺利彦	二、〇〇
家族財產國家の起原　内藤吉助	三、〇〇
（二）勞働運動、婦人問題	
勞働組合運動史　山川荒畑	三、七〇
勞動組合論　山川菊榮	三、七〇
婦人の勝利　山川菊榮	一、二〇
戀愛論　大杉榮	二、〇〇
男女關係の進化　堺利彦	一、八〇
女性中心と同性愛　堺利彦	一、六〇
男女關係の發達　堺利彦	一、六〇
自由社會男女關係	一、六〇
（三）論文集	
社會主義の立場　山川均	一、六〇
▲社會主義とは何ぞや　堺利彦	一、五〇
▲社會主義の世になつたら　山川菊榮	一、五〇
▲牙を抜かれた狼　堺利彦	一、五〇
▲意氣者と社會主義　堺利彦	一、五〇
▲タンクの水　山川均	一、五〇
▲勞農露西亞の農業制度　横田千元	一、五〇
▲勞農露西亞問答　嶋中雄三	一、五〇
▲如何にして社會主義になつたか　西雅雄	一、五〇
▲賀川豐彦と社會主義　山川均	一、五〇
▲社會主義の進化　山川菊榮	一、五〇
▲リーブクネヒト　同	一、五〇
（四）小說、雜著	
木芽立（ゾラ）　堺利彦	一、八〇
理想郷（モリス）　同	一、三〇
勞働（ゾラ）　同	一、四〇
樂天囚人　同	一、五〇
レニンとトロツキ　山川均	一、五〇
革命家の思出　大杉榮	三、三〇
猫の百日咳　貝塚渚六	一、四〇
（五）パンフレット	
▲社會主義とは何ぞや　堺利彦	一、〇〇
▲社會主義の世になつたら　山川菊榮	一、〇〇
▲牙を抜かれた狼　堺利彦	一、〇〇
▲意氣者と社會主義　堺利彦	一、〇〇
▲タンクの水　山川均	一、〇〇
▲勞農露西亞の農業制度　横田千元	一、〇〇
▲勞働婦人の解放　堺利彦	一、〇〇
▲勞働運動桃太郎　山川均	一、〇〇
▲智識階級に與ふ　山川均	一、〇〇
▲農村問題　安成貞雄	一、〇〇
▲犬芝居と猿芝居　藍井眞澄	一、〇〇
▲文學青年に與ふ	一、〇〇
▲特殊民の解放	一、〇〇
社會主義者の社會觀　山川均	一、〇〇
女の立場から　山川菊榮	一、〇〇
現代生活と婦人　大杉榮	一、〇〇
正義と求める心　堺利彦	一、〇〇
唯物史觀の立場から　堺利彦	一、〇〇
恐怖闘爭歡喜　同	二、〇〇
火事と牢鐘　同	二、〇〇
社會問題管見　河上肇	二、〇〇
社會主義的諸研究　高畠素之	二、五〇

黑狐と人間

（新イソプ物語の三）

安成貞雄

樺太のある森の中に、昔々大昔から住んで居る黑狐の一族があつた。此の一族は、森で獲れる食べ物を分け合つて、大勢仲よく、皆安樂に暮して居つた。

其のうちに、或る時、髮の赤い眼の碧い二本足の、人間と云ふ生き物が渡つて來て、其の森を片つぱしから拓り開き始めた。一族のものが、うつかり姿を見せると、妙な機械から、ドンと恐しい音がしてハツト思ふ間もなくコロリと斃れる樣な、物騷な事になつた。一族は、森の奥へ逃げ込んだ。人間がだん〳〵押し込んで來るにつれて、食物を獲る場所がだん〳〵狹くなつて來た。

或る日のこと、ドーン、ドーンと遠雷の樣な音がした。森の木々でさへ、身慄ひした。狐の一族は森の奥の奥の穴に隱れて、塊まり合つて慄へて居た。其の音が止んで、狐共が、恐々森の端まで食べ物をあさりに出ると、その邊をあるいて居るのは、髮も眼も眞黑な人間であつた。併し、其の搖いで居るのは同じ樣な機械であつた。狐共は、背慄へ上つて、また森の奥へ逃げ込んだ。

黑髮黑眼の人間は、やがてどし〳〵森を切り開いて、次第に奥へ踏み込んで來た。狐共の食べ物を獲る地面は、日に月に縮まつて行つた。其のうちに、一族の數は、從前と大した異ひもなく殖ねて行つて先祖代々住んで居た穴には、住み切れなくなつた。しまいには、一族の内の家を繼ぐものしか食つて行けない樣になつた。二番目三番目の子狐は、森の外に稼ぎに出なければならなくなつて來た。其の親や兄が、森へ殘つて、子弟の身の上を心配して居る所へ、森の外の便を持つて來たのは、人間であつた。

人間の話を聞くと、稼ぎに出たものは、温つぽい土臭い穴などに住まず、立派な家で暮して居た。食べ物をあさりに出るに及ばず、三度に三度、森では食べない樣なものを宛てがはれて居た。仕事と言つては、一日何時間か、規則正しく働くのであるが、是れが爲めに身體が丈夫になつて、毛色が美しくなつて居た。

之れを聞くと、森に殘つた若い狐は、吾も吾もと、其の人間を便つて、森から出た。

行つて見ると、成るほど食物には不自由しない。けれども、寢るにも起きるにも、働くにも、遊ぶにも、何一つ自由がなかつた。野山を驅けまはつて山鳥や雉子を探すと云ふ樣な、本性に適ふ樂みはなくて、金網や木柵が出來て居る。何處へ行つても、人間が居て、跳び越へることも、潜り出ることも出來なかつた。

狐共は、大きくなるにつれて、不滿になつて來た。小屋に住ませ食べ物をあてがふ位の情があるなら、何故もつと自由を與へないのか、不審に思ふ樣になつて來た。

やがて、其の不審が晴れる時が來た。併し其の時は、人間の手にかゝつて、其の皮を剝がれる時であつた。

何故尻がムズ〳〵するか

或處で其の仔狐達が、大勢寄集つて、池の中で泳いで居たが、其の中の一疋がフト妙な顏をして、「私、何だか尻のところがムズ〳〵する」と云ひだした。すると又一疋の奴が、私も何だかムズ〳〵するよ、と云ひだした。其時、一疋の賢こい狐が、「諸君、僕は皆さんの尻のムズ〳〵する訳を知つてゐる。それは、今に我々の尻尾が無くなつて、其の代りに手が二本と足が二本ずつ出來るのだ」と講說した。

「そんな馬鹿な事があるものか」と先づある奴が嘲笑つた。「無茶な事を云ふもんぢやい」とある奴がたしなめた。

「イヤ諸君、僕の云ふことは本統だ」と賢こい狐が、「諸君は、此の池の中から這ひ出すのだ。そして水を吸ふ代りに手と足とで以てヒョン〳〵と跳ぶ樣になるのだ。即ち我々は成長して